様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４８７２

研究課題名（和文）小中一貫教育に展開できる新たな美術教育カリキュラムをリデザインする

研究課題名（英文）Redesign a new art education curriculum that can be applied to elementary and middle school integrated education

研究代表者
松久　公嗣（MATSUHISA, Koji）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００３８０３７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本とイタリアの児童・生徒による作品展を開催した。展示作品に関わる教科書の内容やプロジェクトの内容を合わせて展示することで，鑑賞者に研究内容を分かりやすく紹介した。日本での展覧会にLucia Levrini氏を招きワークショップを開催し教育関係者との交流を深めた。
イタリアの「公教育紀要」の内容を分析し，幼児教育の表現領域に近い括りで解説されていること，「アートと映像」と示されるように映像を重視していることを明らかにした。
研究成果となるカリキュラムは，教科書採択の時期と合わせて各学校や教育委員会に提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小中一貫教育や小中連携は全国的に拡大傾向にあるため，具体的に図画工作科と美術科をつなぐカリキュラムの開発は学校現場の教員を支援する提案となりうる。また，研究成果は，教育大学の教員養成カリキュラムへ反映させることで社会的に有為な教育者を輩出へとつなげることができ，未来の学校教育を支える学生にも作用し，美術史や地域学習を融合した鑑賞教育や表現活動として児童や地域の教育に直接的な効果を発揮することが見込まれる。

研究成果の概要（英文）：The "Japan-Italy Cultural Exchange Exhibition" was held by Japanese and Italian children and students. By introducing the contents of textbooks and projects related to the exhibited works, we introduced the research contents to the viewers.
Analyzing the contents of the "Bulletin of Public Education" in Italy, it was clarified that it was explained in a group close to the expression domain of early childhood education, and that video was emphasized as shown in "Art and video".
A curriculum that will be the result of research will be proposed to each school and board of education at the time when the textbook is adopted.

研究分野：美術

キーワード：Reggio Emilia Approach　図画工作　美術　小中一貫

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

小中一貫教育は，義務教育 9 年間の学びを地域ぐるみで支える仕組みとして制度化されたコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とともに，2016 年度の創設を契機に導入する自治体は拡大傾向にある。(「コミュニティ・スクール　地域とともにある学校づくりのために」，2016，文部科学省)

しかし，「小中一貫教育についての実態調査」(2014 年，文科省）で指摘されるように，『現職教員の多忙化（業務量の増加）と負担感（業務量増加による心身両面での疲労感）の増加』に関わる課題は，その後の先導的な取組においても解決されることなく，“最も大きな課題”として示されている。(「小中一貫教育の成果と課題に関する調査研究」，2015，国立教育政策研究所)

具体的な解決策を見いだせないまま制度化が進み，小中一貫教育が導入・拡大傾向にある現状を危惧しており，教員を支援することのできる具体的なカリキュラムの構築が急務と考えた。

そこで，小学校図画工作科と中学校美術科をつなぐ具体的なカリキュラムを再構築して各学校や教育委員会に提案することで，多忙な学校現場の教員を支援しつつ，小中をつなぐ仕組みが構築できると仮定し，本研究課題を企画した。

具体的なカリキュラムを作るにあたっては，北イタリアのレッジョ・エミリア市（Reggio Emilia）で実践される『Reggio Emilia Approach』の理念と，単元（題材）の系統的つながりを重視した日本の図画工作科・美術科教育の学習指導要領ならびに教科書の内容を融合することで，理想的な芸術カリキュラムがリデザインできると考えた。

レッジョ・エミリア市は文化と歴史の町で，芸術専門家であるアトリエリスタ（Atelierista）と保育者の協働保育を特徴としたレッジョ・エミリア・アプローチ（Reggio Emilia Approach）と呼ばれる芸術・科学を重視した幼児教育を実践している。世界規模で拡大するこの幼児教育分野の研究に対して，小・中学校の研究が皆無であることに疑問を抱き，2011 年にレッジョ・エミリアにおける初等教育の現状を視察したことが縁となり，レッジョ・エミリア市の小中学生と宗像市の小中学生による絵画作品の交流展覧会「宗像市，レッジョ・エミリア市交流児童画展」（現「日伊文化交流作品展」）を継続開催するに至っている。Reggio Emilia Approach では，体験や言葉を重視した長期間の造形活動が特徴となるが，その延長上にある小中学校の授業では地域の文化や歴史に関わる美術史の理解を重視しており，言葉や造形活動と組み合わせた個人の探究活動が計画される。日本の学習指導要領でも鑑賞活動の重要性が高まり，「言語活動」や「アクティブ・ラーニング」といった文言も身近なものとなってきた。一人の教師に教育内容を委ねられる比率の高いイタリア式教育方法において，系統立てて作成されている日本の教科書に興味を示す教員も多く，互いの特長を融合することでともに活用可能なカリキュラムの作成が可能であると考えた。

２．研究の目的

本研究は，レッジョ・エミリア市が実践する，芸術を重視した幼児教育に流れる哲学と，単元の系統的つながりを重視した日本の図画工作科・美術科教育の理念を融合して，小中一貫教育に展開可能な新たな美術教育カリキュラムを構築することで，拡大傾向にある小中一貫教育の課題とされる『現職教員の多忙化と負担感の増加』を軽減し，具体的かつ有意義な 9 年間を見通した造形活動のカリキュラムを提案することを目的とする。

また，研究の成果は教育大学の教員養成機能と現職教員の研修を介して，恒常的に社会に還元できることから，教育現場に着任する教員や現職教員を継続的に支援できるものとなる。

３．研究の方法

本研究では，研究目的にそって申請者ならびに研究協力者による現地調査を行ったのち，以下の点について分析を進める。

(1) レッジョ・エミリア市の幼児教育の内容が初等教育に移行する段階で変容するカリキュラム等の課題を抽出するとともに，教員の資質と児童の表現力との相関を分析する。

(2) レッジョ・エミリア市版の学習指導要領となる「公教育紀要」(Annali della Pubblica Istruzione）の内容を翻訳し分析を深める。

(3) 双方の特質を融合した新たなカリキュラムと授業を協同開発し実践する。

(4) 児童画の交流を通して表現活動の変化を視覚的な資料として収集・分析・保存し，本研究が感性教育に果たす役割と有効性を，児童画の表現や内容の変化を比較することができるようにする。

４．研究成果

(1)2018 年度に行った現地調査では,連携する小中学校と他の小中学校を視察し,Reggio Emilia Approach を予算・人的支援の側面から支援する組織“Reggio children”の存在が大きいことが分かった。小学校では毎年 2・3 校の学校を選定し集中的に予算配分することで，選定された学校は幾つかのプロジェクトを企画・実践することが可能となる。また，報告書を兼ねるドキュメンテーションは各学校の実践者から提供された画像などの資料を編集し，学校の壁面等に掲示され，子どもたちや教師，さらには保護者にも情報提供と活動を振り返る機会を与える。時に活動内容は動画で編集され，ドキュメンテーションや動画の内容を評価し優秀な活動に対して賞が与えられる制度もあった。連携する小中学校の担当者は日本の図工専科教員と同様に特別に

学校に配置される教員と，幾つかのプロジェクトで成果を挙げている学校の教員で，これまでの活動内容等が高く評価されている教員であることが分かる。この教員等に，経験年数や造形活動に係る興味や指導能力といった資質の差が子どもたちの表現力にどのような影響があるか尋ねたところ，すべての教員に教育に係る能力差という考え方は存在しないという返答があった。日本では経験年数を中心に教育実践能力の高低を前提とした研修会などを設けることもあるが，イタリアの教員の立場や個人の権利という意識が反映しているのか，教員の能力差という表現には大きな抵抗があった。しかし，実際に連携する教員等が中でも高く評価されていることや，子どもを学校に通わせる保護者の話として，教員の資質の違いが気になる等の話を伝えると，公の回答とは別にそういう考え方や見方があることについて理解を得ることはできた。さらに地域によってはReggio Emilia Approachに沿ったプロジェクトが実践しにくいところもあるようで，日本・イタリアともに地域の特徴に即した様々な課題が存在することを確認できた。

2011 年の訪問時には世界的に注目される幼児教育と初等・中等教育の間には大きな意識差があり，レッジョ・エミリア市が統括し潤沢な予算と理解がある幼児教育に対して，国が統括し組織と予算が異なる小中学校では大きな隔たりがあった。しかし 2012 年以降に先述した Reggio children を含む組織改編が行われ，幼小連携に関わる統一的教育理念を共有できるように，レッジョ・エミリア市版の学習指導要領となる「公教育紀要」が著された。(2012 年)

(2)「公教育紀要」(Annali della Pubblica Istruzione) は，全88頁からなるＢ5判の書籍である。日本スタッフの渡邉弓子（伊語通訳・翻訳家）の翻訳を基に，この内容を分析した。

はじめに最新の教育法規や公的指針，教育の目的，カリキュラム制度や組織に関する記述がある。その後，学習目標や評価に関する内容が示され，幼稚園から小学校につながる内容が教科を中心とした記述でまとめられている。大まかな内容は日本の学習指導要領と違いはない。

目次を見る限り，幼稚園では「子ども，家族，教育環境」,「経験分野」,「自分自身と他人」,「体と動き」,「映像，音，色」,「話と言葉」、「世の中の知識」というように，日本の幼稚園教育要領で示される5領域を細分化した内容が記載されている。小学校では「イタリア語」,「英語，第2外国語」,「歴史」,「地理」,「算数」,「科学」,「音楽」,「アートと映像」,「体育」,「テクノロジー，技術」と示され，日本の社会科が歴史と地理に分かれ，家庭科の代わりに技術がおかれていることが特徴となる。イタリアの歴史を反映して，歴史に関する学習や職人の仕事を支える技術がテクノロジーと一体化しておかれているのが理解できる。日本の図画工作科にあたるアートと映像は，アートに加えて「映像」を特記していることが特徴的である。映像はReggio Emilia Approachを語るうえでも重要な要素で，幼稚園のなかにも「映像，音，色」として独立して表記されており，光や映像，画像が積極的に学習環境に活用されている。

「アートと映像」では，『教育は学校が社会に開かれる事をすすめ，それを強調する手段として貢献し，”若者文化“とコミュニケーションテクノロジーによる教育的提案の新しい様式を批判的に比較し合いながら行われる。』(p73) とされ，映像やマルチメディアを使った表現に前向きなことがうかがえる。

「文化・学校・人」という項目では，教育環境が複雑化するなか，規則や制限を判断する大人の能力が低下していると指摘している。地域と学校が協働し子どもを育てる意識が高いレッジョ・エミリア市において，地域の大人の能力の低下は重要な問題といえる。

また，小学校最終学年の到達点として『視覚に関するテキスト（表現的，叙述的，描写的，コミュニケーションが伝わりやすい）等のヴァリエーションに富んだ視覚的表現や多岐にわたる技術，素材，道具を通してクリエイティブな方法でイメージを強化する知識と能力』と記載し，『それは，観察し，体験し，叙述し，画像（美術作品，写真，宣伝広告，マンガ等）やマルチメディア（スポーツ，短編映画，ビデオクリップ等）のメッセージを解釈する基準となる。』(p74) というよう，子どもたちを取り巻く現代社会において重要な役割を担うことが示されている。日本の教科書でもマンガや写真に関する題材が設定されたり，ポスターなどのデザインにつながる内容が取り込まれているが，ここまで明確に子どもたちの身近な内容を書き記す点が，幼児期からスマホやパソコンを積極的に活用するReggio Emilia Approachの特長といえる。

(3) 日本でも小中一貫教育や小中連携に関する実践例は多く紹介されている。しかしそのほとんどは連携する組織の構築や中一ギャップを無くすための連絡体制に係る報告が多い。内容としては，中学校教諭が専科教員的に小学校高学年を指導する事例報告が散見された。実際には小中学校の教員による協議会の設定自体が困難で，図工・美術に関するヒアリングでは，教科的な専門性の高い中学校美術教員からの要望を6年生の題材に反映させるといった内容もあった。

現在，新学習指導要領に基づいた新しい教科書への移行時期と重なっており，新しい基準でつくられた教科書題材を基とした具体的な題材のつながりを順次示していく予定である。また，「公教育紀要」(Annali della Pubblica Istruzione) の分析結果と日本の学習指導要領を融合した視点で，映像やマルチメディアを積極的に取り込んだ新規題材や，言語活動や他教科との連動を意識した題材，活動内容を視覚的に振り返ることのできるドキュメンテーションの作成等について教育大学のカリキュラムに設定し実践した内容を反映させる。さらに，自国の文化・歴史や地域の文化・歴史遺産等の理解を深める鑑賞や美術史に関わる題材も重要となる。日伊両国で実践し検証した幾つかの題材については，今後の交流作品展の内容分析を継続することで，その内容を評価してカリキュラムに位置付けたい。

(4) 日本・イタリア双方の研究実践校の児童・生徒作品による『日伊文化交流作品展』を開催した。(イタリア展：2019.9-10〈Spazio Culturale Orologio〉, 日本展：2019.12.24-2020.1.9〈海の道むなかた館〉) また, 展覧会の展示作品に関わる教科書の内容や本プロジェクトの内容を合わせて展示することで, 鑑賞者となる児童・生徒や保護者, 教育関係者ならびに世界遺産関連施設となる会場に来館した一般の方々に広く研究内容を紹介した。いくつかの題材を日伊双方で実践し, その内容が反映された作品の交流がなされたが, 現段階では題材を試行した範囲に止まっている。最終年度に予定していた実践のうち 2 件程度がコロナウイルス拡大の影響で中止となったが,連携する各学校での授業実践計画は継続しており,形式的な題材の試行ではなく, その本質を理解しアレンジした授業を実践する予定である。

展覧会事業については, 展示にあたって連携した小学校を中心に地区の図画工作科研究部会の先生方に継続した協力要請を行い快諾を得た。研究内容の理解が深まるとともに本プロジェクト終了後も本展を継続していくことが確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松久公嗣
２．発表標題 小中一貫教育のカリキュラム構築に関する一考察
３．学会等名 第57 回 大学美術教育学会 奈良大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考